

「肥の豊」の初結果時の着果程度

「肥の豊」の初着果の適正着果量は、当年の大玉果生産、樹冠拡大、次年度の安定生産から、単位樹冠容積（ m^3 ）当たり11果程度である。14果の着果では小玉果傾向となり樹冠の拡大も抑制され、9果では大玉果生産はできるが収量が少ない。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室（担当者：榊英雄）

研究のねらい

「肥の豊」は、平成16年から現場への普及・導入が図られている。平成18年から初着果期となるが、初着果では当年の果実生産とともに次年度以降の安定生産と樹冠拡大も考慮しなければいけない。そこで、初着果時の着果程度(単位樹冠容積当たり)が果実肥大、品質および翌年の着花・果に及ぼす影響について明らかにする。

研究の成果

1. 収量は単位樹冠容積当たり14果区で最も多いが、2L級果以下の割合が5割以上と多く小玉果である。11果区は、14果区について収量が多く3L級果以上の割合が高い。9果区は、3L級果以上の割合は高いが収量が少ない(図1、図2)。
2. 果実品質は、糖度はいずれの処理区とも13度以上となり、クエン酸は14果区でやや高い(表1)。
3. 樹冠容積の拡大は、9果区と11果区では差がないが、14果区でやや小さい(図3)。
4. 翌年度の着花は、9果区で最も多いが着果率の低い総状花数も多い。11果区と14果区の着花数は少ないが、総状花数が少なく着果率が高いため、着果数には処理区による差はない(図4、図5)。
5. 「肥の豊」の初着果の適正着果量は、当年の大玉果生産、樹冠拡大、次年度の安定生産から、単位樹冠容積（ m^3 ）積当たり11果程度である。14果の着果では小玉果傾向となり樹冠の拡大も抑制され、9果では大玉果生産はできるが収量が少なく、次年度着花過多となり着果性が劣る。

普及上の留意点

1. 本成果は、7月上旬に一発摘果した場合の成果である。
2. 摘果時期、着葉数により果実肥大、翌年の着花は影響を受けるため、着果程度は単位樹冠容積当たり11果程度を目安に、樹から夏芽が発生する程度の着果量とする。

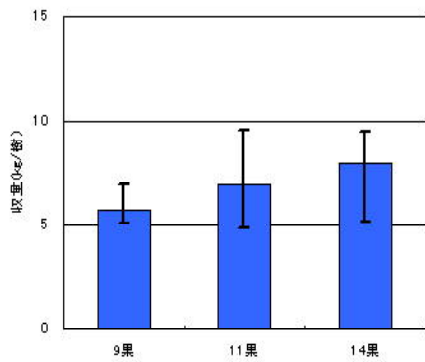


図1 着果程度別の収量

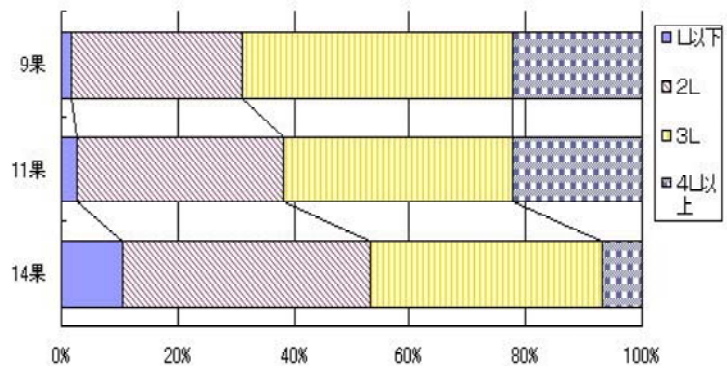


図2 収穫果実の階級割合

表1 着果程度の違いによる果実品質

着果程度	一果重	果肉歩合	糖度 (Brix)	クエン酸	糖酸比
	g	%		g/100ml	
9果	317.4	68.5	13.9	1.05	13.1
11果	310.6	69.0	13.2	1.07	12.3
14果	301.4	67.6	13.8	1.16	12.0

注) 2005年1月18日採取し、2月8日分析した。

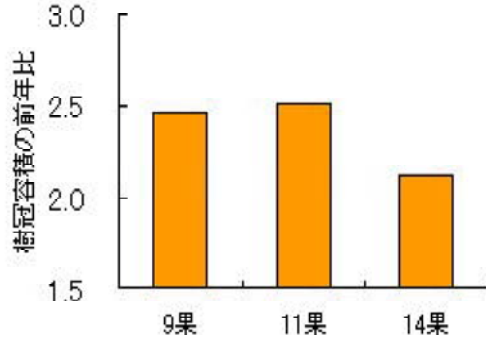


図3 樹冠容積の拡大割合

注) 前年比=(2005年2月)/(2004年2月)

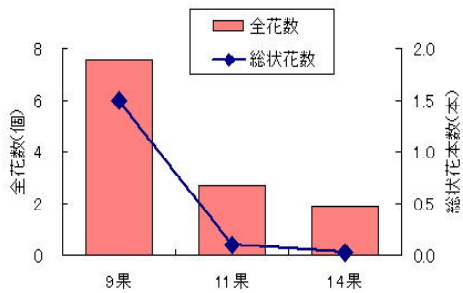


図4 翌年度の着花(母枝1本当たり)

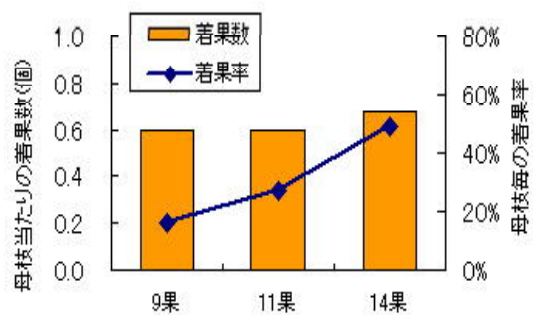


図5 翌年度の着果数と着果率(母枝1本当たり)